

鴟尾の原義について

金子 典正（早稲田大学）

東アジアの古代寺院や宮殿建築の大棟両端を飾る鴟尾は、中国では唐太宗の昭陵献殿の出土例をはじめ敦煌石窟などの壁画にも描かれ、日本では玉虫厨子の鍔葺きの屋根上の金銅製鴟尾、和田廃寺や四天王寺の出土例、唐招提寺の天平の鴟尾などが伝えられている。

こうした鴟尾の研究は、早くは宋・高丞撰『事物紀原』に当該項目がみえ、日本では同書を引用した江戸時代の屋代弘賢撰『古今要覧稿』をはじめ、原田淑人、村田治郎、松本文三郎諸氏が鴟尾の発生と原義を論じ、その後の出土例の増加とともに井内功、大脇潔、襷英涛、黄蘭翔諸氏によって各地域の鴟尾の編年と形状の変遷が明らかにされてきた。

従来説を整理すると、鴟尾は後漢時代の建築明器や画像石にみられるように当初は屋根の大棟両端を反り上げた装飾に始まり、これが南北朝時代には鴟尾となって宮殿や寺院の屋根を飾り、初期の形状は鳥の羽状をした鴟尾が多い。ところが唐時代に入ると主に無文の胴部、縦帯、鱗部からなる形状に変化して、鴟吻、沓形などとも呼ばれた。さらに宋時代には獣頭形や魚類形へと変化し、やがて鯨になったと考えられている。

こうした鴟尾について本発表で問題とするその原義については、これまで二つの説が支持されてきた。すなわち後漢・趙曄撰『吳越春秋』が記す門上の「反羽」を鴟尾のルーツとみなし、初期の羽状の鴟尾や諸作例にみる鳳凰との関係に着目して、鴟尾は鳳凰の羽の象徴であり瑞祥や辟邪であるという原田淑人説と、これを否定する村田治郎説は唐・蘇鶚撰『蘇氏演義』や宋・王溥撰『唐会要』等の記述に注目し、各史料が鴟尾は魚類の尾であり火災除けと記すことから火に対する厭勝とみる説である。このうち原田説は初期の羽状の鴟尾や諸資料を根拠とした説得力ある主張だが、その造形的特徴が変化した後も瑞祥等の当初の意味が長く継承されていたかは疑問である。一方、村田氏が根拠とした史料は鴟尾に鱗部の装飾が現れた唐時代以降のものばかりで、村田説も直ちに首肯し難いのである。

ところで、古代木造建築の意匠では小杉一雄氏が指摘した防火のための藻井や厄災を除くための鬼瓦が夙に知られているが、災害の具体的要因としては火災を招く落雷や建物を倒壊させる大風があげられよう。これを踏まえて関係史料を見直すと正史にみえる鴟尾は雷や大風の災害記事に多く登場することに気付かされる。そこで耐風や避雷のための建築意匠という従来にはなかった視点で鴟尾を再検討すると、原田氏が注目した鳳凰には従来見過されてきた重要な性格がある。風神としての鳳凰である。つまり風神である鳳凰の装飾を大棟上に置いて人々は災害を防ごうとしたのではないか。そして大風を制する鳳凰の翼や尾羽が、風によって上空を旋回する鴟の羽のイメージと重なり、やがて鴟尾と呼ばれるに至った。すなわち鴟尾の原義は風神である鳳凰の羽であったと考えられるのである。